

令和6年度 校内研修全体計画

I 研究計画

1 研究主題

「 中野地区を愛し、貢献する生徒の育成 」
～地域の現状や将来について考える起業体験学習を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の教育課題

- ① 平戸市を含め長崎県全体が、急速な人口減少と少子高齢化に危機感をもち、その対応に迫られている。第3期長崎県教育振興基本計画（2019～2023年度）において「長崎の明日を拓く人・学校・地域づくり」を目指した「ふるさと教育」が推進されている。さらに、「ふるさとに誇りをもち明日を担う人材の育成と個性豊かな地域文化の振興」の基本理念が掲げられている。
- ② 平戸市、そして中野地区でも、急激な人口減少は大きな課題である。中野地区の人口は、1353人（令和5年）であり、統計上毎年46人ずつ人口が減っており、25年後には統計上人口は0になる。このため地域固有の歴史や郷土芸能、伝統文化などの豊富な学習材を生かしながら、平戸の魅力に触れ、それを地域と共有し発信できる環境を整える必要がある。そのためには、地域と学校がより一層連携しながら、地域を担う後継者の育成を図ることが必須であり、学校も積極的に地域に関わる必要がある。
- ③ GIGAスクール構想の実現に向けて、ICT機器の本格活用が始まった。本校でも積極的活用が進められているが、活用の検証から効率化を目指し、学力や協働する力の向上につなげていくことが課題である。また、通常学級においても、個別の支援が必要な生徒が在籍している。そのため、特別支援教育に対する教員の理解と同時に支援方法の拡充が必須であり、その手段の一つとしてICT機器の効果的な活用が挙げられる。

(2) 生徒の実態

昨年度行った事前・事後アンケートで肯定的な回答結果は以下の通りである。

質問内容	事前（20名）	事後（20名）
平戸・中野は好き。	100%	100%
ふるさとのためにできることがある。	95%	100%
将来平戸で生活したい。	80%	85%

地域が抱える諸問題に対する当事者意識や、ふるさとへの貢献意識は年々向上傾向にあり、学校行事において地域の人々との交流を深めたり、地域に出て清掃活動をしたりすることなどが要因として挙げられる。また、昨年度、キャリア教育の公開授業を行い、平戸の魅力や過疎について考え発表したこともその一因と考える。

将来の平戸市を牽引していく人材を育成するためには、継続して、充実感や達成感を味わわせ、自己肯定感を高めつつ、新しいことや困難なことに積極的にチャレンジする精神を育むことが大切である。同時に、将来何らかの形でふるさとに貢献できる方法を自ら考えていけるような生徒を育てていく必要がある。

(3) 学校教育目標の具現化

(1)(2)の現状に対応し、更なる取組を重ねていくことで、学校教育目標「求めて学び心身ともにしなやかでたくましい生徒の育成」につなげる。

3 研究仮説

現在の世の中は、少子高齢化、人工知能 AI の進展など「変化の多い、予測困難な時代」を迎えている。そんな予測困難な時代に生きる子どもたちにとって、「変化に対応して自分の将来を切り開く力」が必要不可欠であるととらえ、株式会社を立ち上げ、話し合い活動や発表活動を多く実践することにより、ふるさと中野地区の未来を担う実践力を育むことができるであろう。

- (1) ふるさと教育を教育課程の中に位置づけ、特に総合的な学習の時間において、株式会社の活動の起業・運営を通して、地域の人材や教材を活用することで地域に貢献しようという心情が高まるであろう。
- (2) ICT 機器を積極的に活用することで、生徒一人一人に応じた学びが実現し、さらに協働的な学びを設定することで、集団としての学力向上につながるであろう。
- (3) 授業の改善を行うことで、「思考力、判断力、表現力」を高め、学びに向かう力を育むとともに、自己の生き方を考えていくための資質・能力が育つであろう。

4 研究内容

(1) 地域の良さや課題を見つけるためのふるさと教育の工夫

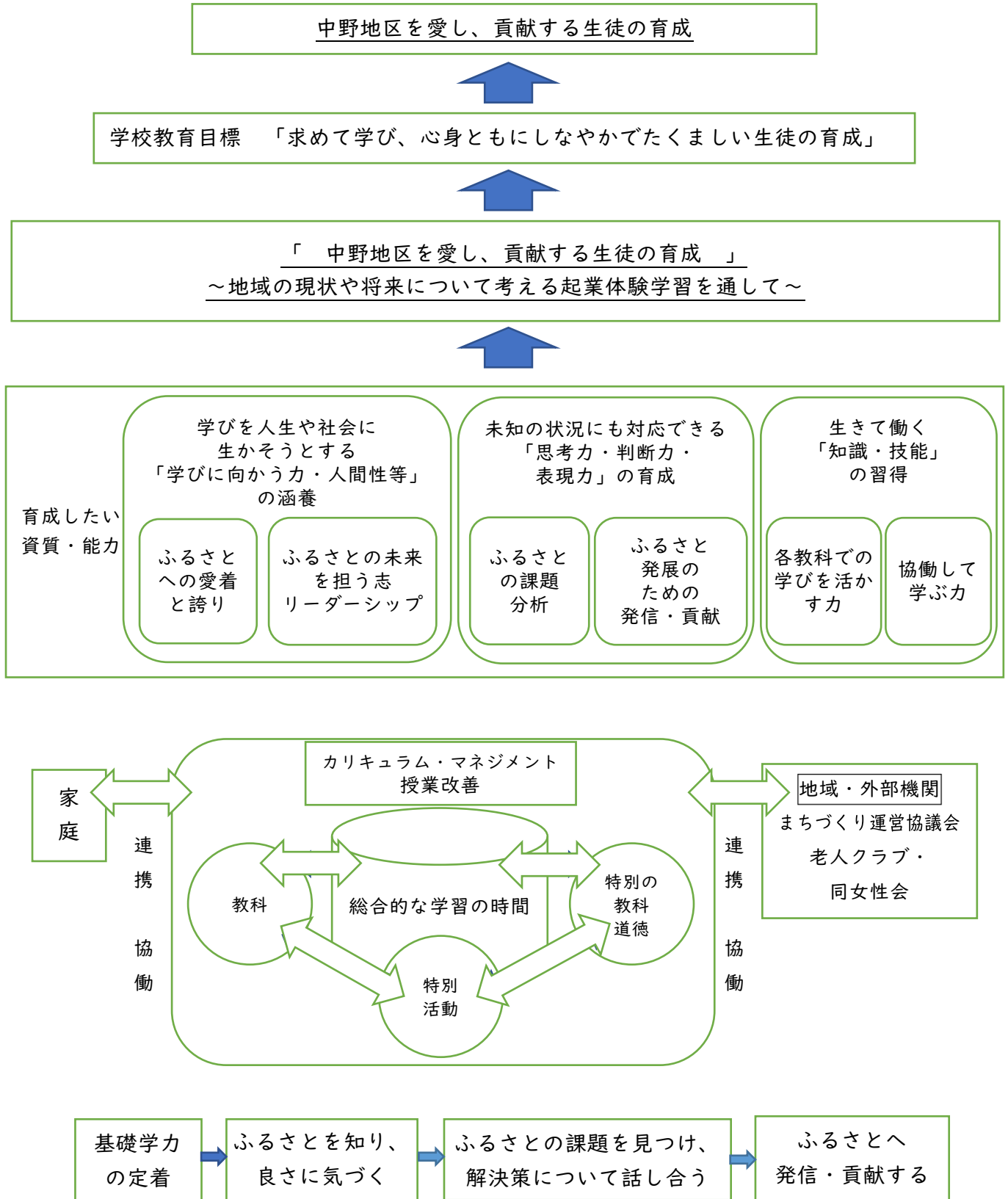
総合的な学習の時間の内容の工夫

- ア 中野中ジャンガラ学習会の実施（花笠⇒笛作り⇒演奏）
- イ ふるさと教育講演会の実施
- ウ 中野地区まちづくり運営協議会との連携
- エ 株式会社の立ち上げ

(2) 実践力（「思考力、判断力、表現力」を高め、学びに向かう力や自己の生き方を考えていくための資質・能力）を育むことを目指した授業および全校生徒による協働的な学びの場の設定

- ア ICT 機器の積極的活用による個別最適な学び
- イ F.F での協働的な学び
- ウ 全職員による研究授業および授業の公開

5 研究構想図



6 年間計画

時期	内容	備考
4月	○校内研修 ・学校経営方針などの共有 ・生徒の実態（課題）把握 ・研究主題・研究仮説の設定 ・F.Fの計画 ○オリエンテーション 講演会	
5月	○校内研修 ・年間計画立案 ・全体及び各研究部（年間計画及び具体的な内容） ・学力向上プランの策定	
6月	○校内研修 ・Q-Uアンケートの分析（各学年） ○全校総合「中野中ジャンガラ学習会」	
7月	○校内研修 ・学期の反省、夏季休業中の研修について	
8月	○校内研修 ・全国・県学力調査結果分析 ・ICT研修会	
9月	○校内研修	
10月	○校内研修	
11月	○校内研修	
12月	○校内研修 ・学期の反省	
1月	○校内研修 ・令和6年度 研究のまとめ 成果と課題	
2月～	○校内研修 ・次年度の方向性の話し合い ・平戸市学力調査の分析と次年度の課題確認 ・学力向上プランの振り返り	
3月	○校内研修 ・次年度の校内研修計画の検討	

・随時、研究授業と授業研究を行う

7 授業研究について

(1) 「KJ法+スリー・プラス・ワン法」で実施

スリー・プラス・ワン法で授業を分析し、問題解決の話し合いを行う。

- ① 付せんに記入したことを、紹介しながら模造紙に貼る。
- ② 付せんを内容ごとにグループ分けをして、小見出しをつけ整理する。【構造化】
- ③ 「良かった点」を3つ、「課題」を1つにしぼる。【整理】
- ④ 課題について、具体的な改善方法を考える。
- ⑤ 協議したことを自分のこととし、実践につなげる。

(2) 授業研究の視点…①教師の意図、②生徒の姿、③教師の働き掛け

の3つの視点から捉える。

- ① 教師の意図（教育目標・研究主題）
 - どのような力を育むか。
 - ねらいにそって対話的に活動する場面が設定されているか。
- ② 生徒の姿
 - 主体的な発言や記述が見られたか。
 - ねらいにそって対話的に取り組む姿が見られたか。
 - ねらいとする能力を高めるための活動・発言が見られたか。
- ③ 教師の働き掛け（発問や指示、板書、資料等を具体的に構想できているか）。
 - 発問や指示に対して、主体的に活動するための工夫が見られたか。
 - 生徒の反応に応じて理解や活動を促す対応が見られたか。見取りができていないか。

3つの視点を関連付けたり、共有させたりすることで、授業研究が一貫性をもって深まり、協議を活性化させる。（県教育センター リーフレットNo. 4から）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 授業者の反省（5分）② 各班でKJ法による授業分析（30分）（職員を2つの班に分ける）<ul style="list-style-type: none">ア 教師の意図が研究のテーマと一致していたか。イ 生徒の変容（活動）を引き出すことができたか。ウ 教師の働きかけは有効だったか。<ul style="list-style-type: none">付せんの活用 青色・・・有効な活動赤色・・・改善点・疑問点・質問など③ 発表（10分）④ 教頭先生・校長先生から（5分） |
|---|